

みんなが認め合える世界を

香取市立小見川中学校 3年
多田 風花（ただ ふうか）

人権についての作文を書くにあたって、私は苦しかった小学生のときの記憶を思い浮かべた。私は幼い頃から吃音があり、言葉の話し始めがスムーズに出てこず、最初の語を連呼してしまうことがよくあった。

幼稚園の頃は吃音が出ても、気にせずおしゃべりをしていました。小学校低学年になると、ものまねをされたり「おもしろいしゃべり方だね。」と言われたりすることがあったが、そんなに気にしなかった。四年生になる頃、友達に「どうしてそんな話し方をするの。」と聞かれ、答えられなかった。それから、急に吃音が恥ずかしくなり、吃音が出そうになると黙るようになった。意識するようになってからは吃音の出る頻度が上がった。友達とおしゃべりや音読、発表が怖くなった。英語の授業のとき、先生がアイスクリームの絵をさして、「英語でなんというか分かる人。」と問い、私は挙手をした。指されたので「アイスクリーム。」と答えようとしたが「ア」の語が出てこない。挙手をしたにも関わらず、黙りこむ私に先生は「緊張しているんだね。」と別の人に答えさせた。「緊張なんかしていない。簡単な答えなのに。どうして私はみんなが普通にできることができないの。」と母に問い、悔しくて泣いた。母と話し合い、先生に相談することにした。すると先生は言葉の教室があることを教えてくださった。そこでは、吃音は悪いことではないと教わった。少しずつ吃音を受け入れられるようになった。五年生になったときに、私はクラスみんなに打ち明けたくなった。先生に相談したら、翌日先生がみんなに吃音について丁寧に説明し、私のことを伝えてくださった。みんなは意外にも真剣に聞いてくれた。それからは発表の際、私が吃音が出そうになり「話しにくいです。」と伝えると、席の近くの友達が「代わりに読もうか。」と助けてくれた。今までストレスだった、話すことが嫌じゃなくなり、だんだん自信がついてきた。そして六年生になり、私は初めて学級委員長に立候補し、やり遂げることができた。自信とともに、だんだん吃音が出なくなり、いつのまにかみんなと同じようにスラスラ話せるようになっていった。

もしも、最初に相談した先生や家族が「そんなこと気にするな。」と私の悩みを受けとめてくれなかったら。もしも、クラスメイトに打ち明けたとき、ふざけて面白がられていたら。もしも、いじめに発展していたら。私は今頃、話すことが大嫌いで自信をもてなかったかもしれない。

吃音について調べていて分かったことがあった。吃音は、大半が大人になるまでには治るが、ずっと治らない人もいる。私は吃音症の人の中では、多数派だった。治る人が多いため「吃音は克服できるもの」と思われ、苦しむ人たちがいる。だから、私は「吃音を克服した。」とは絶対に言わない。

私は家族や先生方、クラスメイトのみんなのおかげで、楽しく話すことを取り戻せた。みんなには本当に感謝をしている。これからは私も、困っている人を助けられる人間になりたいと強く思った。

中学生になり、私はクラスの副委員長や女子テニス部の部長、合唱コンクールの指揮者や体育祭の応援団など様々なことに挑戦できるようになった。中学校からの友達は私が吃音症だったことは多分知らない。小学生だったあの頃、一人でも心無い対応をする人がいたら、きっと自信を持ってないまま、これらのことに挑戦することはなかったと思う。周りの人の対応次第で悩んでいる人の人生を変えてしまうということを、私は吃音を通して学んだ。性的少数者や人種の違い、障害などで差別をし、ひどい言葉を投げかける人たちがいると私はとても胸が痛む。私も少数派だったことがあるから。大勢の人が当たり前にもっているものをもたずに悩んでいる人、それを誰にも言えず一人で抱えこんでいる人、死にたくなってしまう人を救えるのは、周りの人たちの温かい対応だ。

私は苦しかったあのときに、たくさんの人の思いやりに助けってもらった。みんなが私の悩みを受けとめてくれたから、苦しい思いを勇気を出して打ち明けて、本当に良かったと思えた。私も思いやりの心を大切にし、人に伝えられるようにしたい。そして相手の立場に立って考えられる人になりたい。差別をする人は、もしかすると満たされない思いがあって、弱い立場の人たちを攻撃してしまうのかもしれない。そのような人たちの心を救えるのも思いやりだと思う。思いやりはきっと連鎖する。みんなで思いやりをつなげていき、少数派も多数派も互いに認め合える優しい世界をつくりたい。